



月刊 第 573 号

花待つ頃の

うれしさは

村の社に職があがると一寸いづもの日常の風景が変化して、ひと昔前の閑かな時間の流れが戻ってきたような、なんともなつかしい匂いみたいなものが感じられます。

今年の特にお天気が穏やかでまさにどこのお祭りも当り年だったように嬉しい限りです。折角のお祭りが雨になると気持もしょんぼりです。

海も連日トロリと風いでこれ



満開の桜の下での花見を夢見て数年前から観光協会の肝煎りで海浜公園一帯に植栽。十年も経てば立派に育ってくれるだろう。(三月末朝霧の中)



白山さまの入学祭。今時の子供はのびのびとしたもの。少子化のせい、今年の子供は僅か16名。昔は胸の前に記念品のノートを恭々しく持って緊張で固っていた。



聚感園の入口で旅行者を前に史跡ボランティアが熱の入った説明中。観光案内所に事前に申込みば対応してくれる。

又嬉しいことになつかしい鯛が獲れて魚屋の店先に青々と活きのいい鯛の箱が並べられていわゆる地物の鯛が食卓に上っているようです。

かと言って昔風にコンロにマツブシを山に積んで団扇でパタパタ煽いで炭をおこしてじゅうじゅう油をしたたらせて熱ついで塩焼きを頂くと言うところが無理でしょうが、時間に合わせるて焼きたてを配達して貰えなかった時代ですから少々冷めかかっててもそこは我慢と言うところでしょう。

月参りの檀家のお内佛にはこのころ笹だんごや大福、おこわが供えてある家が目立って多く、時々こちらもお茶と一緒に

に御馳走になったり、おばあ様へ一つなどと頂戴したりと有難度いことです。やはり昔からの慣しで呼んだり呼ばれたり、配ったりとこんな時は日頃戸棚の奥へ仕舞われていた重箱が結構活躍しているように入れ物一つでなつかしさが増幅されてなんとなく豊かな気持ちにさせられます。

それに周りの風景も徐々に緑が増して鋭角な世界から全てが丸味を帯びてそれは人の心にも知らず知らず影響するようであらう。言葉もこの季節が一番優しく心地良いように感じられます。

「暖っこなうっていい季節になりましたねえ」「お天気つづきで難しいですねえ」等々。あちこちでははつとするように花が姿を

現わして、こんなに花に恵まれた中いたのかと驚く程に豊かな自然環境を蓄えているふるさとが誇らしい限りです。

れんぎょう、椿、木蓮、桜、それに山野草も次々に咲きついで、最近では随分山歩きをする人が増えたようで、雪割草、二輪草、かたくり等の群生地を皆さん良く知っておいでと感心いたしました。山菜も仲々のもので、食料難時代と違ってまさに優雅に食卓を飾ってくれてるのに恐れ入る次第。これはまさに厳しい季節を持つ地方の花待つ頃のうれしさを味わう特権のようです。

さてさてこのまま鯛がとれつづけて今年のお祭りは鯛祭りの名にし負うことができるのかな。

海からの贈りもの

磯町 阿部茂

今年の冬は雪が少なかつたものの時化が多かつた。北西の風が強いと磯辺に海草、木竹、貝殻等が打寄せられる。

十二月末から二月末にかけて近くに住む弟が「ぎばさ」料理を作つて数回持つてきてくれた。冬の料理にはこれが最高だ。良寛さまが五合庵で詠まれた神馬藻に

酒とわさびを賜わるは
春は淋しくあらせじとなり
の一首がある。神馬藻はぎばさのこと、師は大変お酒がお好きでした。「寺泊おけさ」の文句「吹けや下西あがれやぎばさ



三番公園へ移植した枝垂桜が見事に咲いてくれた。越浦神社前港が見下ろせる。平野愛子の「港が見える丘」の歌が似合いそう。



花咲爺さんの話ではないが、春の花は突如驚きの中で出現する。この家の庭のコブシもその通りで樫の大木をバックに一齐に花開いてみせる。



何とものどかな日射しの中、公園の遊歩道の脇に二輪草が群生している。道には落椿が落ちてなお命のたけを主張しているようだ。

祭りの記憶

さとう・のぶひと

やつと冬が終わりました。この冬はことのほか長かつた——などと書いて、毎年同じことを思っているのに気がきました。

可愛い殿御の磯廻り」に見られる通り下西は北西の風、

厳しい風の季節も楽しみはある。ぎばさの時期が終わると春です。（阿部さんは病気で体のご不自由な中頑張つて筆を執つて下さつた、当年八十一歳とのこと。文中ぎばさ料理は普通熱湯を通すと茶色から濃い緑色に変わりそのままサラダや酢の物、又油揚げや竹輪等を加えての甘辛く味付けした煮物、味噌漬も可）

寒冷地に住んでいると、いつだって冬は長く感じられるものです。とくにこの冬は、異常に寒暖差が激しゅうございました。そのせいか、残念ながら冬を越せずにお亡くなりになったお年寄りやご病人が多かつたような気がいたします。

四月に入り、朝晩はかなり冷え込みますが、日中はほかほか陽気が続いています。大きく育った庭木の染井吉野は、去年より一週間以上早く満開を迎え、すでに花吹雪を終えました。今は、濃いピンクの桃の花が鮮やかに咲き誇っています。

在郷をクルマで通ると、あちこちで村祭りの高い幟が立ち、神事の開始を告げる花火の空砲

が青空を轟かします。かつては祭りになると、大福餅や笹団子を作り、赤飯を添えて親戚中に配つたものでした。「お呼ばれ」がかり、親戚が一同に会してご馳走を食べます。祭りのお膳はその当時、最大級の豪華なものでした。

筆者は幼少時、父親に連れられて、夏戸と引岡の祭りに毎年「お呼ばれ」しました。物の不杯詰め込むことのできる祭りの会食風景が、ほのぼのと廻ってまいります。村祭りの夜が暮れ、

しこたま酔つた父親とともに自転車を引き連れて町に帰る道すがら、水が入り代掻きされたばかりの田んぼで、無数の蛙の奏でる鳴

き声が耳の底に今でも焼き付いています。祭りは野積から始まり、町の白山媛神社大祭で終わります。野積の祭りに雪が降つた、などという話も聞いたことがありますが、本当でしょうか？

あの村この村と、村祭りの進行中に田が打たれていきます。もうすぐ田に水が入り、代掻きが済めば、いよいよ田植えが始まります。田植えは白山媛神社大祭のころがピークになります。農耕社会のシステムは、機械化が進んでもそう変化しませんが、祭りを軸にした農耕民族の記憶、日本人なら誰しも均等に刷り込まれています。

幼少時に体験した祭りの記憶

幼少時に体験した祭りの記憶

幼少時に体験した祭りの記憶

幼少時に体験した祭りの記憶



最近は祭りを日曜に合わせる所が多い。ここ年友は4月19日を守っている。村の方々も職が立っていたが、明治初期本村の諏訪神社一つに合祀したとの話。



平日だが祭だけは昔のままに守ろうと若者達も休みをとって神楽に参加。写真を一枚所望。私の頭にもかぶせてくれた。御利益発毛を期待。



それぞれ職には願いを込めて揮毫。今年は新しい職を新調。雨もよくなったので下ろすのではないかと急行したが、雨でも下ろしませんと意気軒昂。

は、いくつになっても消えませ
ん。中でも、聚感園に小屋掛け
した見せ物の記憶は鮮烈に残っ
ています。その年は「蛇食い女」
でした。
小屋の外に大きな看板が掲げ
られ、生きている大蛇を半裸の
身体に絡みつかせた妖艶な若い
女性が描かれていました。いや
が上にも恐いもの見たさを刺激
します。
小学校の高学年くらいだった
と思います。父親からもらった
小遣いと、子供神楽で稼いだ祝
儀をしつかり握りしめ、高額な
入場料を払って小屋に入りまし
た。

小母さんが蛇を食べているあ
いだ中、講師師は同じことを立
て続けにしゃべりまくり、「蛇
は、頭の方が香ばしくて美味し
いのだそうです」などと言って
います。それが「蛇」だと言う
から、「蛇」を食べていると思っ

て見物しているわけ、そこに
は「蛇」以外の、例えば「魚」
ではないかという疑いを差し扶
む余地がありませんでした。
小屋掛け、アルコール漬けの
動物標本、講釈、そして「蛇食
い女」——今になって考えてみ
ると、よく出来た仕掛けでした。
小屋の内部がすでに見事な祝祭
空間となっていました。見物人
を非日常性の世界へ誘ってくれ
たのです。
泉鏡花の短編に「蛇喰い」で
したか「蛇くひ」でしたか——
という作品があります。詳しい
内容を忘れたので本を探したの
ですが、見つかりません。あの
作品に出てくる「蛇喰い」は、
門付けをして一軒ずつ回る、鏡

花の生きた明治時代の大道芸で
した。
飢饉の際、農民が蛇を食べた
とか、太平洋戦争の南方戦線で
敗兵が飢えを凌ぐため食べた
かは広く伝えられています。し
かし、それが「芸」になり「見
せ物」になるというの、蛇が
食べることに対する強い禁忌が
働いているから、と言うことが
できます。祭りだからこそ、
「芸」として「見せ物」として
神事と同等の資格で許された
言うべきでしょう。

志木市		座間市		川崎市		埼玉市		千葉市		青葉市		東京都		富山市		岡山市		姫路市		誌代御後援(敬称略・順不同)	
山崎	折田	佐藤	小黒	滝口	濱田	指田	演善	柏谷	内山	鈴木	矢野	越智	田中	大味	菊地	久住	平野	国上	修一	金五千円	
定次	敬子	健一	義雄	雅代	善二	輝美	栄作	清高	幸子	桂子	トミ	正芳	吉雄	ソイ	金五千円	金五千円	金五千円	金五千円	金五千円	金五千円	
金三千円	金三千円	金三千円	金三千円	金五千円	金一万円	金五千円	金五千円	金五千円	金五千円	金五千円	金三千円	金三千円	金三千円	金三千円	金三千円	金三千円	金五千円	金五千円	金五千円	金五千円	金五千円

渡辺マツイ	金三千元
水沢文夫	金三千元
本間スイ子	金三千元
河合忠衛	金三千元
柳下浩三	金五千元
新谷正次	金五千元
小林源八	金五千元
渡辺浩一	金三千元
古川原太	金三千元
星哲郎	金三千元
松井万徳	金三千元
増井一司	金三千元
刈部義治	金三千元
早川栄	金三千元
大矢千代	金三千元
美濃谷玲	金五千元
湧井医院	金三千元
長谷川一成	金三千元
桑原恭一	金三千元
信江誠治	金三千元
本間八重子	金三千元



木族館の脇に海洋深層水の露天風呂を設えた浴場がオープン。海一望のロケーションと宿泊もできることで仲々の評判。寺泊の新しいスポット。

小波会三ヶ月会詠草

兼題 春時雨・入学試験他
片袖を
濡らして帰る春時雨
小走りに
湯の街芸妓春時雨
助六の
鱸背な見得や春しぐれ
春時雨
山門不幸門に建つ
軒の端に
花芽育む春しぐれ
齋藤 紫苑



五月の本祭へ向って四月は町内祭りの月。金山から港町まで各町内それぞれの神社に御神灯が下がる。ただし五区の愛宕さまは藤の季節に合わせて。写真は山の町十二神社。

春時雨

水輪をためて露天風呂
目覚めたる
床にききふる春時雨
緊迫の
入学試験守り札
咳一つ
入学試験静まりぬ
そのことに
触れず受験の子と歩む
岩壁に
ぬつと船着く牡丹雪
内藤 蓮子
小島 冬扇
小島 温石
竹内 霍山
水沢 蕉子
江原 汀子

啓蟄や

合併劇で揺れる町
三月や
姉九十の高笑ひ
大木の
枝の限りに芽吹きけり
大越碧水子
能登 頑牛
外山きよし

あとながき

そろそろ来月の白山さまの大祭に向っての楽しい話題の季節です。ここところ随分お天気がつづいたもので、これで春の変わり易い天気を抜け出して安定期に入るのか、いやいやここでいい顔して雨祭りになるんじゃないかなど、悪い予想をしてみるのも楽しみのひとつなのでしよう。今年には神楽の当番は第五区。下からの御興様のおわたりです。楽の練習も始まっていることでしょう。夜風の向きでお囃の音が聞こえる季節です。

毎月二十日発行
寺泊ふるさとだより
誌代税共(百円)

編集人 中 村 興 樹
発行人 新 潟 県 寺 泊 町
発行所 新 潟 県 寺 泊 町
ふるさとだより
郵便番号 九四〇一二五〇二
ダイヤル局番 〇三二五八七五
電話 二〇二一九番
振替番号 〇〇六〇三三三七四五
印刷所 吉野印刷株式会社



ここは片町の門前屋敷。昔正福寺と長善寺があった寺跡である。おくりなどと言う屋号の家もあった。18軒ほどの家並が、今は8軒だけになった。